

[研究ノート]

「生きる力」の基礎となる心の教育の在り方

領域「人間関係」からの視点

大野 ひとみ

The Perspective on the Basis for “Viability” and
“Human Relationship” in the Domain of Nurturing Heart

OONO Hitomi

In recent times, a great number of problems have been indicated concerning with children, such as the lack of the ability in communicating with others or the lack of the ability in communicating with others or the lack of the self-assertion and of the consciousness of concerning in social rules, and the capacity of their relating to others or their viability has been decreased since the infancy.

I would like to examine the following points at issue:

About the specific characteristics of the current society surrounding children and what is expected of the children there?

What is the important view point or task for the education of infants to nurture the relations between children and adults and to promote the sound development of the infants in mind and body? And what kind of role is required for nurturing persons who are assigned to the task of the education for infants?

Key words : a relationship of mutual trust, human relations, self-assertion

キーワード : 相互信頼関係, 人間関係, 自己主張

はじめに

近年、コミュニケーション能力の不足、自制心や規範意識の不足など、人とのかわりに関する子どもたちの問題が多く指摘され、幼児期から人とかかわる力や生きる力が低下してきている。今日の子どもを取り巻く社会の特質や、そこで子どもたちに求められることは何なのか、子どもの人との豊かなかわりを育み、心身の健やかな発達を促す幼児教育において重要な視点、或いは課題はどのようなものか、そして、幼児教育の課題に対する保育者にはどのような

役割が求められているのかについて考察する。

I 幼稚園教育要領・保育所保育指針改定の背景とその視点を確認する。

① 改定の重点として下記の事項を見る
(幼稚園教育要領)

- ・心身の健康を培う活動を積極的に取り入れると共に、幼児期にふさわしい道徳性を生活の中で身につけさせること。
- ・自然体験、社会体験などの直接的、具体的生活体験を重視すること。

- ・知育偏重の所謂、早期教育とは質的に異なる幼児期にふさわしい知的発達を促す教育の在り方を明確に示し、体験的な学びを豊かにしていくこと。
- ・自我が芽生え、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の成長の特性に応じたきめ細かな対応を図ること。
- ・集団とのかかわりの中で幼児の自己実現を図ること。
- ・家庭の要請に応じて積極的に子育て支援や預かり保育を進めること。

② 「幼稚園教育内容の改善」注目すべき点

- ・保育における教師の役割の明確化
- ・生活における「直接体験」の重視
- ・「自我の育ち」「道徳性の芽生え」「幼児期にふさわしい知的発達」
- ・高齢者をはじめ地域社会の人々など、自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみを持つ」「良いことや悪いことがあることに気づき、考えながら行動する」など生活体験に関する内容が明示されている。

以上 これらを促すことが「生きる力」と「心」の育成のために強調されている。

(保育所保育指針) 内容省略

Ⅱ 生きる力と心の育ち

——幼児教育の基本——見直してみる。

幼稚園や保育所生活の中で、幼児にとって一番期待される行事は遠足であろう。「あした天気になあれ！」と楽しみに待つのはどの子ども同じだろう。広い芝生で友達と思い切り転がりまわる子どもいれば無心に草花を摘む幼児もいることだろう。

日々の保育では様々な環境に誘発され、自発的な活動を自分の力で展開していく姿は多様である。こうした物的環境が豊富に用意されているから良いということではない。そこに遊びの楽しさを共感し合える友達や先生が、如何に存在しているかという点である。喜び、我慢、葛藤、がんばり、思いやり等、人と共に生きてい

くのに必要な感情を仲間と共に味わえる体験が、そこにどれほどあるかということである。

幼児は安定した情緒のもとで自己を充分発揮することで、発達に必要な体験を獲得していく。人間関係の幅が広がると、幼児の生活経験も自ずと広がっていく。多くの友達といろいろな体験を通して人や自然、身近なものなど周りの環境から刺激を受けることによって「生きる力」として次の点をあげる。

- ① 如何に社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力
- ② 自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性、逞しく生きるための健康な体力
- ③ 人間は、他の人々と共に集団や社会の中でお互いに支えあって生きていく存在である。他の援助から遮断し、全く自分の力だけで生きる事は困難である。

本来「生きる力の育成」とは、健康性の高い自律に向けた社会化の過程である。自己中心的な自己主張ではなく、周りの主張に対して心を傾け、お互いを認め合い、その個性を尊重していく姿勢が重要なのである。個々の子どもの育ちはこうした周りの環境の中から育てられていくものである。

Ⅲ 現代社会と人とのかかわりを見直してみる。

現代子どもが置かれている社会や家族の状況は次のような特徴が挙げられる。

- ① 子どもの数の減少により、子どもが常に大人の管理下で自分たちの遊びや生活を楽しめる人や場所、時間が奪われてきていること。
- ② 情報化社会が急激に社会を覆い、子どもの世界をも支配し始めていること。
- ③ 情報機器は人の知力を大きく拡大し、生活様式を変え社会文化を発展させた。

①～③により子どもが体や心を通して触れ合う体験の機会が奪われ、子どもの心身の未発達

やゆがみと、それによって生じる幼い頃から要求される問題が増加している。これらの特徴が人々の人間本来の生活を阻害していると考えられる。

現代の能力主義、成果主義は情報化社会を動かす大きな原理であり、学校教育にも大きく影響を及ぼしている。何かが出来ることや、出来るだけ効率よく早く、ある程度の成果を挙げるなど幼い頃から要求されてくる。ゆっくりな子、出来ない子といった多様な子どもたちの存在は認められず、人より早く、優れた成果を得るという競争原理を生み出し、子ども本来のあり方、子供同士のかかわりを奪っていく。

Ⅳ 人とのかかわりを育む幼児教育の今日的課題

① 規範意識、道徳性の芽生え、協同性の育成

人が生きるということの中心課題は、人間が自己の実現と他者とかかわりという二つの側面をどのように統合して生きるかということにある。人は自分の欲求や価値観を調和させながら、どのように社会に適応していくかという人が「生きる」上での重要な課題であり、人とのかかわりの中で生きていく人間にとって、人生の開始期から直面する課題なのである。

子どもが這い這いし、歩くようになると自らの意図や欲求に基づいていろんな所に行く。母親はその行為は危険として、その行為を体ごと阻止してしまう。子どもは母親の止めさせたい気持ちを察し、自分のやりたい気持ちとどう折り合いをつけるかを学んでいかねばならない。社会の価値は家族やその他の人々から具体的なかかわりを通して幼い時期から子どもに示され、子どもはその意味を理解しつつ自己発揮の仕方を学んでいく。

子どもは園での遊びや生活を通して、自分と他者の調和を図るためのきまりがあることに徐々に気づいていく。そしてそれを守る必要感、守るために自己の欲求と他者の欲求との間に生じる葛藤、それを守るために自分の行動を調整すること、その結果生じる気持ちよさなどを経験していくもの。しかし、幼児期は自分の行動について客観的に考えることや善悪の判断が未熟

な時期でもある。保育者はそのような子どもの規範意識の芽生え、又、善悪に関わる判断や心情、行動などの傾向である道徳性の芽生えを見取り、それを長い見通しで繰り返し、丁寧に培っていく必要がある。そのために日々の生活の中で、子どもの行動や動機、心情を理解し、一人ひとりの子どもに共感的に関わり、場面や必要に応じて細やかな配慮をすること、多様な人と関わり、様々な価値やルールに触れる機会を作ることなど重要である。

又、子どもたちが友達と楽しく活動する中で共通の目的を見出し、友達と工夫したり、協力したりする経験がより一層求められている。豊かな遊びや生活を通して人との関わりを深め、共通の目的を生み出し、それが実現する喜びを味わうことによって、協同する経験を重ねられるよう保育者には豊かな遊びや生活を創出する環境を構成していくことが求められている。

② 自己の育ちと精神的回復力

自分の思い通りにならないとキレたり、暴力を振るう子ども、或いは逆に自己をおおらかに表現できず、些細なトラブルで精神的に傷つきやすい子どもが増えている。このような子どもの育ちの問題を背景にして今日特に幼児期からの心の教育として、他者の意図や欲求に気付き、自己の欲求や意図と調和していく力、困難な状況において失敗や葛藤を感じながらも、そういった状況に上手く適応するための精神的回復の発達が重視されるようになった。精神的回復力の高い子どもは未知の場面に会っても、楽しく積極的にチャレンジしたり、失敗も前向きに考えたり、怒りや葛藤などの感情を上手く転換し、コントロールできたり、明るく見通しをもてるなどの傾向が強いといわれる。

精神的回復力を育むためにはまず、幼児期に信頼できる親の愛情や温かいケアの元で「人と関わることは楽しい」と言う経験を積み重ねることが重要である。そして安心して自己を発揮し、子供同士の対立や葛藤が生じた場合には養育者や保育者の援助の下で考え、対処しようとし、そして援助されながらそれらを乗り越える

経験を積み重ねることによって、自分からコントロールする力や精神的回復力の芽生えが培われていく。養育者や保育者が日々関わる中で、子どもは楽しさ、嬉しさ等の快の感情を共有するだけでなく、怒りや悲しみ、葛藤などの感情を「怒ったのだね」「嫌だったのだね」などと言葉に置き換えて返したり、宥めたり、見守ったり、規則を分かりやすく示したり、共に活動したりすることなどを通して、幼児期にふさわしい自己や精神回復力の芽生えを育てていくことが重要であると考えるのである。

③ 発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育

人の発達やそれに基づく学びの過程は言うまでもなく連続するものであり、「幼児期」「児童期」などの発達段階によって明確に区切られるものではない。幼児期から児童期に入ると、幼児期の特徴が全く見られなくなったりするものではない。また、園・学校や家庭、地域といった子どもが育つ多様な場での発達や学びも連続的であり、家庭での行動と園での行動が無関係であるとは思えない。子どもの発達や学びは時間的、空間的に連続している。子どもの発達や学びが連続しているが、学校教育は幼稚園、小学校、中学校など発達段階を踏まえた異なるシステムとして発展してきており、それらのシステム間の連携が十分になされていないまま各システムが運営されがちであった。子どもは段差のあるシステム間の移動に戸惑いを示し、不適応を起こすこともあった。今、各学校間で互いに交流し、子どもや子どもを取り巻く環境への視点を共有し、自ら振り返ることを通して理解しあうことが求められている。今日、発達や学びの連続性を踏まえた教育、園生活や家庭生活の連続性を踏まえた教育の充実は幼児教育の大きな課題として広く認識され、各園や学校間の段差をできるだけ滑らかにするような連携が多く行われるようになった。又、園、学校、地域という子どもが育つ場を連続的に見て、それらを分断することなく、それぞれにおける子どもの発達や学びを理解し、補完しあい、高めあえるように繋ぐ試みも実践されるようになった。

家庭や地域の教育力の低下が指摘される今日、子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育をより一層推進していくことが求められる。

V 他者との信頼関係と関わりの基盤

① ヒトに特徴的な人間への志向

ヒトは人間に対する高い感受性を備えて誕生する。これらはもちろん生存のための特徴だとされているが、この特徴により出生直後から驚くべき相互交渉能力を発揮するという。と言っても人間のもつ様々な能力は、それを受け止め、返してくれる他者の存在を抜きにしては成り立たない。

人間の成長の道筋は様々な課題を乗り越えていくプロセスとして捉えることができる。エリクソン (E・H) は、誕生から死にいたるまでの心理・社会的発達の諸段階の系列を、“危機”という概念を用いて説明している。氏は主要な人生段階における同調傾向と失調傾向の葛藤から現れる心理、社会的強さを表すものとして、希望、忠誠、世話を挙げ、この中で、希望は乳幼児期における“基本的信頼”対“基本的不信”の対立から現れるという。基本的信頼とは「希望の証であり、この世の試練と人生の苦難から、われわれの人生のあらゆる側面を汚染し、他者との友情や愛情は我々を守る一貫した支えである。わずかな不信が我々を守ることがあり、又それなしに生き延びることは難しいことも確かなものだが、しかし、基本的には、不信は我々の人生のあらゆる側面を汚染し、他者との友情や愛情を我々から奪い取る」のであるという。

② 乳幼児の発達とかかわりの基盤

乳児の日常生活を思い出してみよう。直ぐ傍にいる人物とは、多くの場合養育者である。乳児が泣き出すと、とんで来て声をかけ、又抱き上げて心地よく揺らしてくれる。オムツが濡れて不快だという信号を発すれば、やがて清潔で気持ちのよいオムツに換えてくれる。乳児は泣き声によって自分の状態を表わすとそれらの信号をキャッチし、素早く不快な状態を改善して

くれるのが養育者なのである。これらのやり取りの積み重ねによって、乳児はある人物にとって特別の意味を持つことを理解するようになる。もちろん、乳児は周囲の人物を引き付けるような遺伝的にプログラムされた能力をもつといわれる。養育者を引き付けておくことは乳児の生存率を高めるし、不快な状態を速やかに改善するにも効果を持つ。

このように遺伝を基盤とした能力が、養育者との相互交渉によって社会的なものへと変化していく。言語によらないコミュニケーションの成立が見られ親子のペア毎の独特な様式が見知りと言った養育者と他の人物との区別に発展していく。ところが、以前は親的な養育者との信頼関係がその後の対人関係の基底条件だといわれていたがその後の研究から、乳児は複数の人物との関係を同時に発達させることが明確になった。従ってたとえ親的人物との関係に問題があっても、保育者との安定した関係が取り結ばれている場合には、子ども同士の間には夫々影響しないことが確認された。

③ 信頼関係と自己に対する肯定感

このように、子どもは自分にとって重要な他者との相互交渉の過程で、その人物が自分の要求に対して応答的であるかどうか、その人に受容されているかどうかについての子どもが作りあげる愛着の対象や、自分自身についての特定のモデルは、乳幼児期以降、児童期、青年期、その後の人生を通じて発達する自己概念やその内容に大きな影響を及ぼすものと考えられている。信頼関係が成立すると、子どもはその人物を道具的に使用するようになる。入園から凡そ1ヶ月も過ぎた頃から、保育場面では「先生〇〇してー」とか「先生△△とって…」といった具合に、子どもたちは保育者を利用するようになる。「自分でやれるのに甘えているのではないか？」という見方もあろうが、違った角度から考えてみることも必要である。特定の人物との間に安定した関係が成立すると、その人物が自分の拠り所であるという確信を持てるようになると、子どもはこのように振舞うのである。

子どもと保育者の関係が構築され、子どもは肯定的に受け入れられていると意識されるようになる。それは子どもが自分という存在を肯定的に受け止めること、つまり肯定的な自己概念を形成していくのであるという。

Ⅶ 依存と自立

依存が自立を阻む概念であるかのように考えられた時期もあったが、現在では十分に依存することが自立へと繋がるということが明らかになっている。

そこで自立に向かう時期の子どもは「自分でやりたい」でも「できない」それでも「やってみたい」という感情の揺れ動きや葛藤を経験する。このような子どもの心情と行動とをしっかりと受け止める保護者や保育者の存在は重要である。幼稚園や保育所に入園してきた子どもは保育者が当てになる存在だと分ると、その保育者を安定の拠り所にして、そこから他の子どもへの関心を広げていく。

① 保護者と子どもの関係から保育者と子どもへの関係へ

家庭や保護者から離れて幼稚園や保育所で過ごすことは、子どもにとって人生最初の環境移行となる。期待もあるが不安もある、面白そうだが手を出せないといった気持ちの狭間で揺れ動く。送り出す保護者の気持ちも揺れ動くものである。

② 保育者と子どもの関係の形成

幼稚園や保育所では自分のやりたいことができる、又やりたいことを保育者が気付き認めてくれる。これらのことを子どもたちが実感として分かるようになると、様々な動きが出てくるようになる。それには保育者は子どもの動きを丁寧に見て、受け止めることがポイントとなる。子どもの経験していることを言語に表して返すこと、または子どものやっていることをなぞるように同じ行動で示すことは、子ども側からすれば受容されているという感覚を持つこと

に繋がる。その安心感が、子どもの気持ちを遊びへと向かわせる。

③ 保育者と子どもの関係から子ども同士の関係へ。

入園までの家庭生活の中で、多くの子どもは大人との付き合いにはかなり習熟している。しかし、兄弟が少ないこともあって、子ども同士の付き合いは不慣れである。大人はすんなり貸してくれたものを、他児は簡単には貸してくれない。それどころか自分がしばしば使っている玩具さえ、油断すると奪われてしまう。このような一見トラブルに見える場面や、子ども同士の関係の芽が育つ場面にもなりうる。

Ⅶ 自我の発達と自己主張・自己抑制

① 自分ということ——反抗・自己抑制

幼児期の自己の発達と、自己主張、自己抑制の2つの側面から検討した見解によれば、日本の幼児の自己主張、実現面は早期に頭打ちになり、その後は自己抑制面だけが伸長していくという。この傾向は男児より女児で顕著であるとされる。

これは日本の文化と密接な関係があると指摘されている。「出る釘は打たれる」という諺が示すように、伝統的に日本では集団の和が尊重されてきた。家庭におけるしつけや幼稚園や小学校においても、社会化の方向としては同じである。

現代グローバルゼーション政策によって、自国内から国際舞台へと視野を広げなければの現状になった現在、幼児期からの自己主張が強調されるようになった。しかし、現状では洗練された自己主張や強力的な交渉のための教育は、いまだ殆ど行われていない。

幼児期より少し前の歩行開始期（1歳半から3歳ごろ）の反抗期や自己主張の発達についてみてみると、2歳前後になると、それまでとは反抗の質が変化する。子どもの反抗が激しくなり、養育者から見れば一筋縄ではいかなくなるのである。

この時期の特徴は、子どもの「こうしたい」思いと養育者の「こうさせたい、こうさせたくない」思いとぶつかり合うことになろう。子どもは例え自分でやりたいと思っても、その状況判断は未熟である。したがって親側では安心して見守るわけにはいかないし、実際にも目を離れた際にトラブルが生じやすい。親が子どもの意図を抑えようと、子どもから激しい情動反応や反抗行動が起こる。それらは親の感情を逆なでし、感情のコントロールさえも難しくなってしまうものである。やがて子どもの反抗が収まる頃、親は子どもの言語発達や排泄などの生活習慣の確立を見て、子どもの言動の意味を適切に読み取れるようになる。つまり子どもの変化に合わせて親自身の対応を上手に変化させることが必要なのである。

② 遊びをめぐる交渉の発達

遊びは子どもと子どもを結びつける。入園からしばらくして、幼稚園や保育所の生活リズムが掴めるようになると、子ども達は遊びに集中するようになる。誰かが熱中して遊んでいるとか、面白そうな雰囲気や漂い始めると、その周辺には他の子どもたちも集まってくる。積極的に仲間入りしないまでも、そのあたりで同じような遊びが始まる場合もある。真剣に遊ぶようになると、子ども同士の意見の食い違いやお互いの考えの食い違いが表面化するようになる。

Ⅷ 集団の中で役割と責任・道徳性の芽生え

① 自分の役割を果たす

自分のやりたい遊びや活動を思う存分経験することに加えて、クラス全体や学年全体で共通の目的を持って取り組む活動も必要である。それは「友だちとの関係が少しずつ深まってくると、共通の目的や課題を持って活動することが楽しいと感じられるようになってくる」からである。

② 「責任を果たす」(事例)

年下の3歳児を思いやって

5歳児がジャガイモ掘りのあとの活動の一コマである。

自分たちが収穫したジャガイモを3歳児に振舞おうという活動である。

3歳児を招待して席に座ってもらい、席の前に1つずつゆでたジャガ芋を乗せた皿を運んでいた時のことである。机の上に置こうとした瞬間一人の子どもの前でジャガイモが床に転がってしまった。一瞬空気が止まったが、「ちょっと待っていて！」5歳児が用務員室に5歳児のためにとっておいた中から（5歳児は自分たちで掘ったこともあり、1人2個ずつに決められていた）1個とってきて間に合わせたのである。咄嗟の判断だったであろうが、5歳児の見事な対応振りである。この経験のベースには、自分たちもかつてご馳走してもらった経験があるのだろう。成長と共に取るべき役割は変化し、その期待される役割を引き受けて取り組むことも必要になる。集団の中での役割を果たすこと、そして自分よりも下の子どもにも思いを寄せながら責任を果たす姿が表出された事例である。

③ 道徳性の芽生え

「よいこと」と「悪いこと」はどのように判断されるのであろうか。これらを判断しようとすれば、一義的にきまらないことに気付くのである。誰の立場で考えても善悪の判断が付くようなことは、日常生活の中では限られているのかもしれない。例えば人間同士の関係の中では、「ある人が仲よしのAさんに良かれと思ってやったことがBさんにとっては非常に迷惑であった」ということがある。「板ばさみ」といった言葉もあるとおりでである。

④ 「ちゃんと勇気を出して謝れてよかった」

（事例）5歳児クラス～4月

最年長児になった4月、植物園への園外保育での出来事である。お弁当の後、子どもたちは三々五々集い合って“鬼ごっこ”や“花いちもんめ”などして遊んでいた。

ところで三人の男児が少し離れたところで、枯れ枝や、落ち葉など集めて遊んでいた。丁度

手の届くところに枝が垂れ下がっていて、一人が枝を揺らし始めた。さらに面白がって三人で枝を揺すった拍子に、枝が折れてしまったという事件である。

それを見ていた子が担任に報告した。保育者はその場に駆けつけると、三人は別の場所に移動していた。保育者は元の場所に連れ戻し、薄い表皮一枚で木にどうにか繋がっている枝を見せながら「なぜこういうことになってしまったのか」を尋ねた。

はじめに注意しておいたことを思い出させ、大変なことをしてしまったのだということを、厳しい口調で子どもたちに伝えた。そこで「植物園の人にも、誤りに行かなければ…」先生同伴で管理事務所へ。

子どもたちの表情に緊張がはしった。不安そうな三人を励ます意味も込めて「ファイト、ファイト！」と声をかけながら走って行った。保育者は足取りの重くなった三人に「正直に謝ればきっと許してくれると思うよ。自分たちでちゃんと伝えてね」といって事務所に到着。顛末を話したところ、その方は「君たちも転んですりむくと痛いだろう！それと同じで、木も傷付けられると痛いのだ。君たちは痛いとき、涙が出ちゃうだろう！木も痛くて泣いているのだ。君たちは痛いって言えるけど、木は痛くとも何も言えないのだよ。だから木の気持ちになって大事にしてあげなくてはいけないのだよ！」と子どもたちにわかるように話して下さった。その方は「これからは気をつけるのだよ、分かったね」三人は肩の荷が下ろされて、サーッと走り出した。

以上の事例では問題をどのように対処するかという例である。

此処で起きたことは「良くないこと」或いは「悪いこと」と子どもは言うだろう。「木の枝を折ること」は「悪いこと」と判断するに違いない。しかし、よいことや決まりを守ることは知識として言葉で学習するのではなく、園生活での壊す、破る、競う、争う経験など、様々な経験の中で保育者の適切な指導と援助によって、やっていいことと悪いことを体験していく。そ

していざこざや葛藤とその対処を通して、道徳性が芽生えるのである（国立教育政策研究所教育課程研究センター2005）

問題が起きた時にどう考えどう対処するか、その対処能力を如何に育てるかは、児童期以降も重要な課題であると考ええる。

Ⅸ 人とのかかわりを育てる保育者の 様々な役割

保育者として質の高い具体的な指導計画を立てながら保育を構想し、実践していくのであるが現代の多様な家族の中で多様な育ちをしている子ども一人ひとりの発達や学びのプロセスを理解し、其々のニーズに応じた保育を行うためには保育者には資質や専門性が求められている。

遊びを中心とした実践には、遊びを豊にするという保育者の基本的役割が求められることはいままでもないが、それ以外に様々な役割が求められている。

子どもが園で主体的に環境に働きかけ、生き生きと自己の力を発揮し、可能性を広げていくために保育者の役割が期待される。

① 心のよりどころとして

子どもの入園期は、親密な家族関係から、それを抛り所として生活してきた子どもが、園という未知の場所に入り、新たな生活を新たな人々と始めるのであって、人生の最初の移行期といえる。当然子どもは未知の場で不安を抱く。保育者は一人ひとりの子どもを全身で受け止め、愛情を傾け、受容したい。子どもが悲しくなったとき、困ったときに抱いたり、援助の手を差し伸べてくれる特定の保育者の愛情を繰り返し感じとりながら、その存在が子どもの中で次第に大きくなっていく。その保育者を好きになり、保育者と一緒にいることや活動することが楽しくなり、保育者はこどもにとって、園での安全基地となるのである。子どもの愛情、安心、安全の欲求は基本的なものであり、これらの欲求が人との関わりの中で満たされることが、すべての活動の基礎となる。保育者が子どもにとって

の心の安全基地になると、子どもは次第に園内で居場所や人とのかかわりを広げ、徐々に主体的、自発的に環境に関わっていけるようになる。

② よき理解者・支援者として

保育は集団の中で子ども一人ひとりの自己発揮を援助する営みである。そのためには、一人ひとりの子どもをよく理解することは欠かせない。集団に目を向けるあまりに、一人ひとりの要求に気付かずに、集団になじめない子に否定的な見方をしてしまうことがある。そのような保育者の態度には子どもは敏感であり、保育者や園に対して愛情や安心安全感を抱くことができず、より一層なじめなくなってしまいかもしれない。一人ひとりの子どもを共感的に理解し、必要とされている援助をしていくことによって、保育者は信頼の対象となるだろう。

又、保育者は遊びや集団生活を通して個を育てることを目指すが、そのためには個々の行動傾向や意図や欲求などの内面を理解することが重要である。友達と玩具をめぐるトラブルがあり、気持ちが刺々しくなり、他者に当たっている子ども、やりたいのに「やらない！」と言って意地を張る子どもなどについては、その多様な表現と内面を読み取りながら、共感的に理解していくことが求められている。

又、園生活においては、楽しさや心地よさを感じる経験ばかりではない。今までに経験したことのない新たな課題に出会ったり、難しい課題に挑戦したりするときに、自信のなさや不安で揺れ動く自分、自信のない課題を避けたい自分や、思い切ってチャレンジできた自分など子どもは様々な自己に出会っていく。

さらに幼稚園、保育所はクラスを基本とした集団での生活を目指している。園生活にも慣れ、一人ひとりが自己を発揮してくると、子ども同士の競争や対立、いざこざなどが生じてくる。このような状況は子どもに失敗や葛藤、挫折をもたらすかもしれない。しかし、他者とのかかわりの中で失敗や葛藤、挫折を経験することを通して、子どもは自己や他者との関係や、その中で自分のありように気付いてゆく。葛藤し

てどうしてよいか分からない自分を理解し、共によりよい解決の方法を探ってくれようとする保育者や仲間、そして、保育者や仲間と葛藤を解決し、達成感や充実感を感じる自分などに出会いながら、新たな自己を形成してゆく。このように、カウンセラーとしての役割を果たす保育者は、子どもに共感的理解を示し、子ども自身に生きる力を支えることによって、子どもの絶え間ない自己形成を支援していくのである。

③ 共同作業者として

「環境を通しての教育」に於ける重要な人的環境である保育者は、自ら主体的に生き生きと環境に関わり、活動をするモデルを示していきながら、遊びや生活、その中の様々な作業を子どもと共同でしながら、目的を確認したり、調整しあうことを援助したり、みんなですることの心地よさ、達成感や充実感が得られるように援助していく。保育者は日々の遊びや生活の中で、微笑み、言葉や活動など様々なものを子供と共有していく。園生活を通して心と体全体で子どもと共同し、活動や作業をしていくのである。

④ 遊びの援助者として

保育において、子ども一人ひとりの行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成することは保育の基本である。子どもはどの様な遊びに興味があるのか、どのようなことに面白さを感じているのか、その遊びを楽しむための身体、感情、知的発達はどうなのか、遊びの中で友達とどう関わっているのか、その遊びを通して何を体験するのかなどの理解をもとに環境を構成していく。こどもにとっておもしろく、意味ある「もの」「人」「状況」を準備し、それらとの出会いを子どもに提供していく。遊びは自由で自発的な活動だといわれるが、子どもに自由を与え、見守るだけで遊びが豊になるわけではない。一方で、保育者が管理し、指導すれば、遊びが豊になるわけでもない。遊びを豊にする保育者のかかわりについては、管理か放任か、指導か援助か、働きかけるのか待つのか、保育者

主体か子ども主体かの二者択一の議論がなされがちだが、その両極の狭間に個々の遊びの局面に応じて保育者の多様なかかわりが必要だとしている。保育者自身が楽しく遊ぶこと、「競争だ」と挑発すること、新しく面白い遊びを発案すること、対等な遊び仲間になること、遊びを見守る・支えることなど指導のあり方は多様である。子どもの様子や自らの保育行為を具体的に振り返り、遊びのより良い指導を探っていくことが重要である。

幼児理解をもとにした保育の具体的構想、環境の構成、遊びの実際の指導、振り返り、再び幼児理解への循環が遊びの援助として重要であり、その循環的過程を通して保育者自身も成長していく。

終わりに

現代社会において幼児期の人とのかかわりに関する今日的課題について特に親の共働きの増加により、親の生き方や親子のかかわりの変化や、それに加え情報化社会において人と人とが直接的に関わりあい、対立したり、意見調整に時間がかかったりしながら、歩み寄っていくことが非効率的であるとされ、子どもが一日も早く育つようにそして成功するようにと急がされ、人よりも早く、高い水準でできることがよいという能力主義、競争原理に支配されがちな時代にあって、幼児教育が人と人との豊なかかわりを生み出す環境を提供する必要性に迫られていること。

特に幼児期の人とのかかわりの基礎を育む時期に、規範意識と道徳性の芽生え、友達と協同する体験を通して協同性の芽生えを培うことや、遊びや生活を通して、その中に埋め込まれた秩序や決まりに気付き、それを守ろうとする心情や態度、それに基づいて行動を調整しようとする力の芽生えを培っていくこと。さらに子どもが友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、それが実現する喜びを味わうことによって協同する経験を重ねること、これらの力は豊かな遊びや生活を通して生み出されるものなの

で、保育者の環境構成や援助は極めて重要な位置づけとなってきた。

改めて保育者の役割の重要性を再認識し、同時に保護者とのコミュニケーション能力、子育て支援活動、幼小連携等の課題に対処するための高度な資質や専門性は、養成段階のみでは到底形成されるものではないが必要性を認識し、強調しておくべき課題であると考え。

参 考 文 献

- 武藤 隆 監修 「人間関係」 2007年 初版
萌文書林
- 寺見陽子 編著 「心を育てる人間関係」
2001年 初版 保育出版社
- 幼稚園教育要領解説書 文部科学省発行 2009
年 初版 フレーベル館
- (2011年3月22日受稿)